



『煌夜祭』特別書き下ろし短篇

# 「泣き男」

多崎礼





これでは進むことも戻ることも出来ない。どうしたものかと途方に暮れた。その一方で、不思議な安らぎを覚えていた。もう目を閉じてしまおう。銀の霧に身をゆだねてしまおう。そうすればこの懊悩から逃れられる。穏やかにゆっくりりと忘却の淵へ沈んでいける。

今思えば、あれは死の誘惑だったのだろう。あのまま霧の中に立ちつくしていたら、噂どおり、私はこの世からきれいさっぱり消え失せていたに違いない。

そうならなかったのは、泣き声が聞こえたからだ。

まだ幼い子供の泣き声だった。

私は我に返った。

ターレンの森には人喰いの魔女が棲む。そんな噂を信じる馬鹿どもが、今でも時折、子供を森に捨てていく。初夏とはいえ、夜はまだ冷える。幼子が一人でいたら、朝が来る前に凍えてしまうかもしれない。

助けに行かなければ。

泣き声を頼りに私は歩き出した。

銀の霧が渦を巻く。波のように押し寄せてくる。手足にまとわりつくそれをかき分け、泳ぐように進んだ。ほんやりとした月明かりに、白い大きな木が浮かび上がった。その根元に子供がうずくまっている。まっすぐな黒髪、ターレンではあまり見ない浅黒い肌。まだ七、八歳ほどの男の子だった。彼は両手で膝を抱えていた。身体を縮め、肩を震わせて

泣いていた。喘鳴の合間から、か細い声が聞こえてくる。

「ごめんなさい……母さん……ごめんなさい」

ふと胸を突かれた。幼い日の記憶が蘇ってきた。

私は七番目の子だった。役立たずと呼ばれ、八番目の子の代わりにターレンの森に捨てられた。

きっとこの子もそうなのだろう。

痛みにも似た憐憫が私の心臓をぎゅっと掴んだ。

「泣くな、少年」

私は彼の傍らに膝をついた。

「怖がらなくていい。オレは魔女じゃない。お前を喰ったりしないよ」

出来るだけ優しく言ったつもりだった。しかし子供は泣き止まない。私の方には目もくれない。俯いたまま、祈るように謝り続けている。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

「なぜ謝る？ お前、何か悪さをしたのか？」

少年は頭を振った。ようやく顔を上げ、涙に濡れた目で私を見る。

「よく、悪いことなんか、してない」

琥珀色の双眸が悲しみと戸惑いに揺れている。

「ぼくには蜜族の血が流れてる。だから、いい子でいなきヤダメなんだ。でないと、ぼく、ハズレ者になっちゃうんだ」

「誰だ、お前にそんなことを言ったのは？ 母親か？」

「言ったのはマルティン達だ。母さんは、そんなこと言わない」

少年は目を伏せ、くすんと鼻をすすった。

「でも母さんは、ぼくをエルウィンに入れてくれなかった。開けてって扉を叩いても、助けてって叫んでも、黙って見てるだけだった」

堪えきれなくなったらしい。喉の奥から嗚咽が漏れてくる。涙の粒がポロポロと、あとからあとからこぼれてくる。

「母さんは、ぼくのこと、嫌いなんだ。だから、ぼくのこと、もういらなんて思っただんだ」

「そりゃ奇遇だな。オレも親に捨てられたんだ」

「……え？」

少年は泣くのも忘れ、不可解そうに私を見つめた。

「でも、あなたは大人だよ？」

「だから昔の話だよ。オレがまだ七歳のカキだった頃の話だ」

「ぼくも、七歳だ」

「じゃあ、お仲間だな」

よろしく兄弟——と言って、私は彼の隣に腰を下ろした。白い木の幹に背を預け、ぼんやり霞んだ満月を見上げる。

「悲しいかな、子供を捨てる親は少なくない。だが間違えるな。悪いのは子を捨てる親のほうだ。オレ達は、ただ運が悪かっただけだ」

「運？」

「ああ、そうだ。くじ引きみたいなもんだ。オレもお前も運悪く、ハズレの親を引いたんだ」

「ちがうー」

跳ねるようにして少年は立ち上がった。小さな拳を握りしめ、必死に私を睨みつける。

「母さんはハズレじゃない！ 母さんのこと、悪く言うな！」

私は目を瞬いた。少なからず驚いた。この子は母に捨てられたというのに、まだ母のことをかばうのか。母を憎むことなく、咎はあくまでも自分にあると言い張るのか。どんなに母を慕っても、母が彼を愛することはないのに。どんなに彼が求めても、突き放されるだけだというのに。嫌われているとわかっててもなお、それでも母を愛するののか。

愚かな子だ。

でも、強くて優しい子だ。

「オレが悪かった。言い過ぎた。謝るよ。だから座ってくれ」

私は平手で地面を叩いた。

少年は無言で腰を下ろした。まだ肩が怒っている。

お詫びの印に私はマントを脱ぎ、彼の肩にかけてやった。

「なあ、少年。人は生まれを選べない。だがどう生きるかは選べるぞ。お前はどんな風に生きたい？どんな大人になりたい？」

「わからないよ、そんなの」

泣き虫少年の目に、また涙が湧きあがる。

「ぼくの居場所はどこにもない。これから、どうすればいいのかもわからない」

「だったら探せ」

またぞろ彼が泣き出す前に、私は早口にたたみかける。

「この世に意味のないものなんてない。お前が生まれてきたことにも、母親に捨てられたことにも、こうしてここにいることにも、何かしらの意味がある。それを探せ」

「探せていわれても、何を探せばいいのかわかんないよ」

少年は恨めしそうに眉をひそめた。

「あなたはどなの？あなたは見つけたの？」

「ああ、見つけた」

私は鷹揚に頷いた。

「この人のためなら命を投げ出しても惜しくないと、心も身体も血の一滴までも捧げたくて悔いはないと、思える人を見つけた」

「ほんとに？」

彼はゴクリと喉を鳴らした。身を乗り出し、真剣な顔で問いかける。

「ぼくにも、見つけられるかな？」

「ああ、もちろん」

私は彼の前髪をくしゃくしゃと撫でた。

「世界は広い。お前の想像をはるかに超えるほど広い。この広い世界のどこかに、お前の味方がきつといる。親友や同志だつてきつと見つかる」

「広い世界……」

少年はうつとりと目を細めた。月を見上げ、夢見るように呟く。

「ぼくの味方……親友……同志……」

張り詰めていた気が緩んだのだろう。その頭がぐらりぐらりと揺れ始める。瞼はすでに閉じられて、口は半開きになっている。

「朝まで寝とけ」

私は彼を引き寄せた。その身体をマントで包み、きつちりと首紐を結んでやる。

「夜が明ければ霧も晴れる。そしたらとりあえずウチに來い。ご馳走は用意出来ないが、根菜のスープでよければ喰わせてやる」

返事はない。泣き疲れた少年はすでに寝入っていた。もたれかかる小さな身体。そこから伝わる人の温もり。頬に残った涙のあと。濡れて固まった黒い睫。子供の寝顔を見てみると、なぜか胸が温かくなった。喜びがふつふつとこみ上げてきた。

この子が落ち着いたらデイトルへ連れて行こう。島主が管理する救済院で預かって貰おう。あそこには彼と同年代の孤児がたくさんいる。すぐに友人も出来るだろう。

でも、もしこの子が望むなら、ここで一緒に暮らすのもいい。読み書き計算ぐらいなら私でも教えられる。葉草の見分け方や、活計に役立つ知恵や知識も教えてやれる。戻って来てからはずっと一人で暮らしてきたけれど、子供一人ぐらいなら養えないことはない。

私は木の幹に寄りかかった。泣き虫少年を胸に抱きかかえ、臉を閉じる。

虚無も気鬱も死の誘惑も、泡のようにはじけて消えた。

明日が来るのが待ち遠しい。そう思いながら眠りについた。

翌日、森に差し込む朝日を浴びて、私は目を覚ました。

野宿するなんて久しぶりだ。朝の空気に晒されて、身体がすっかり冷えている。ごちごちに凝り固まった首と肩が、もう若くはないのだという事実を容赦なく突きつけてくる。

「ん——」

両手を突き上げて背筋を伸ばした。

そして、気づいた。

少年の姿がない。丸まったマントの中は空っぽだ。

「泣き虫少年、どこにいった？」

私は立ち上がった。木立の間をウロウロと歩き回った。

「返事をしろ、少年！」

しかし答えはなく、子供の姿はどこにも見当たらなかった。

もし彼が夜中に目を覚まし、いずこかへ去って行ったのなら、気づかないはずがない。しっかりと抱きしめていたのだ。目を覚まさないはずがない。しかもマントの首紐は解かれていない。いくら子供とはいえ、首紐を結んだまま、マントを脱ぐことは不可能だ。

つまり——私は夢を見たのだ。すべては私の妄想だったのだ。重く降り積もった寂しさ空しさが私にあんな夢を見せたのだ。

幾度となく、自分自身にそう言い聞かせた。それでも喪失感は拭えなかった。胸にぽっかりと穴が空いたような寂寞だけが残った。

まん丸に太っていた月が徐々に痩せていく。新月を向かえた後、今度は釣り針のような

月が現れる。

尖った細い月を見上げ、私は思った。

もしあれが夢でなかったら？

噂に聞く銀の霧だったとしたら？

銀色の濃霧は満月の夜、三月続けて現れる。

だとしたら、次の満月の夜にも現れるはずだ。

待ちに待った次の満月。

私は窓辺に椅子を運んで座り、まんじりともせずを外を眺めていた。

夜も更けて、真夜中を過ぎた頃だった。ゆるゆると霧が流れてきた。それは淡く虹色に輝いていた。美しくも恐ろしい、あの銀の霧だった。

やはり夢ではなかった！

いても立ってもいられず、私は外に飛び出した。霧の中を闇雲に歩いた。時折立ち止まっては呼びかけた。

「どこにいる？泣き虫少年？」

耳をすましても返事は聞こえなかった。それでも私は歩き続けた。夜を徹して歩き回った。やがて霧が白銀に輝き出した。霧が薄れてきている。夜明けが近い。

ついに私は立ち止まった。腕組みをして考えた。

この霧は死の世界に繋がっている。だとしたら、むしろ喜ぶべきなのだ。彼は母親に捨てられ、悲しみに暮れ、本来子供が来るべきではない場所へと迷い込んでしまった。その姿が見当たらないのは、あの子が立ち直って生者の世界へ戻っていったからなのだ。

もう二度と彼は現れないだろう。

それでいい。それでいいんだ。

納得しかけた私の頭に、慨嘆の聲が突き刺さった。

悲鳴のような慟哭、堪えようにも堪えきれない号哭。

私は声のする方へと急いだ。

霧が晴れていく。白い巨木が現れる。その前に誰かが立っている。木の幹に拳を打ちつけ、声を張り上げて泣いている。浅黒い肌長い黒髪。顔立ちは泣き虫少年に似ていたが、それは少年ではなかった。二十歳前後の細面の青年だった。

道理に沿って考えるなら、この青年はあの子の父親もしくは兄弟だろう。なのに、なぜか私は確信していた。これはあの子だと。あの泣き虫少年だと。いや、もう少年という歳ではない。泣き虫男——泣き男だ。

「また泣いているのか？」

私の呼びかけに、泣き男は振り返った。

涙に濡れた琥珀の瞳、紅潮した頬、その端正な顔立ちに驚きの色が広がった。

「貴方は——」

言いかけて、口を閉じる。ゆるゆると首を横に振り、吐き捨てるように呟いた。

「まあ、変わるわけないか。夢の中なんだから」

夢ではないぞと言いかけて、私は言葉を呑み込んだ。

彼の目は荒んでいた。夢もない。希望もない。もう誰も信じないと言外に語っていた。夢破れ、大切な人を失い、死の海に飛び込んだ時の私と同じ目をしていた。

「今度は何があった？」

私は彼の隣に立ち、その顔を見上げた。

「なぜ死にたいんだ？」

「死にたいんじゃないでなくて、死ぬしかないんですよ」

卑屈な笑みを唇に貼りつけ、泣き男は答えた。

「あのクソつたれな森に戻らなければ、一年と保たず僕は死ぬ」

彼は木の幹に背を預け、ずるずると座り込んだ。両手で自分の両肩を押さえる。その指の間から銀の霧が染みだしてくる。まるで彼の身体が溶け出しているようだった。彼の肩から銀の霧が湧き出しているようだった。

「僕は目標を見つけた」

すすり泣くように、泣き男はささやく。

「なりたいものも、守りたいものもあつた。けれど、もうかなわない。もう長くは生きられない。こんなふうになられるくらいなら、憧れなんて抱かなければよかった。夢なんて見なきゃよかった。幻の海の底に沈んで、あのまま死んでしまえばよかった」

悲痛な声。苦しい喘鳴。顔を覆って泣き伏す彼に、私は何も言つてやれなかった。夢が破れた後の失望。大切な人を亡くした絶望。その無念は痛いほどよくわかる。だからこそ気休めは言えなかった。安易な慰めも、無責任な激励も通用しないとわかつていた。

「意味なんてなかった」

呻くように、呪うように、泣き男は独白する。

「誰も救えず、何の役にも立てないまま病に冒されて死んでいく。それが僕の運命なら、僕が生まれてきたことに意味なんかない。皆の言う通り、僕は生まれてくるべきじゃなかったんだ」

ああ、私とて同じだ。虚無に取り憑かれ、森をさまよっていた。死は逃避にすぎないとわかっているくせに、責任を果たさず逃げ出そうとしていた。偉そうに説教出来る立場じゃない。それでも——

「自分の命の価値を他人に決めさせるな」

絶望の先に夜明けがあるとは限らない。だが生きてさえいれば希望はある。この哀れな



泣き男にだって、まだ可能性は残されている。なのに諦めてしまうなんて、朝を待たずに人生を投げ出してしまうなんて、絶対にあつてはならないことだ。

ああ、そうだ。これは私の我が侏だ。彼にとつては迷惑でしかない。それでも生きて欲しいのだ。命数が尽きる瞬間まで、彼に生き抜いて欲しいのだ。

「かつてオレは大罪を犯した。罪の重さに耐えきれず、一度は海に身を投げた。だが幸か不幸か、ある人に救われて、今もこうして生きている。オレを救ったその人は、すべてのことには意味があると云った。ならばこの命、人を助けるために使おうと思った。多くの人を救うことで、自分の人生に意味を与えようと思った。傲慢だと罵られたことも、ボコボコに殴られたこともあった。でもやりたいことをやらずに後悔するより、全力を尽くして傷だらけになるほうが、オレの性には合っている」

私の養父は言った。

後悔するような人生は送るなど。それがトウラン家の家訓だと。

「なあ、兄弟。お前もやりたいことをやれ。それがどんなものでもかまわない。誰もが眉をひそめるようなことでもいい。人間として正しくないことだっていい。自分がやりたいことをして、自分の命に価値を与える。残り時間が少ないならなおさらだ。人生の豊かさは人生の長さで決まるんじゃない。どれだけ楽しんだかで決まるんだ。納得の行く人生を送れ。悔いを残すな。その命、最後の一滴まで生き尽くせ」

捲し立てる私に向かい、泣き男が何か言おうとした。

だが次の瞬間、彼の頭上に朝日が差した。

一瞬にして銀霧は消え、泣き男の姿もかき消えた。

その後の一カ月は気が気じゃなかった。

愛されることを知らない男が思いのままに振る舞ったら、きつととんでもないことになる。彼を侮蔑した者達に復讐しているかもしれない。悪逆の限りを尽くしているかもしれない。私は私と同じ大罪人を創り出してしまったのかもしれない。

銀の霧は三月連続で現れる。三度続いて、二度とない。

次の満月が最後になる。

はたして泣き男は、また現れるだろうか。

一カ月後、満月の夜が巡ってきた。

重く湿った真夏の空気に青草と土の匂いが入り交じる。あるかなしかの風に森の木の葉が低くざわめく。ざわわ、ざわわと潮騒のような音がする。

私は窓を開け、夜の訪れを待った。あの霧が現れるのを待った。

やがて太陽は西に没し、森は闇に沈んだ。空から残照が消えていく。すると突然、雨が

降り始めた。雲ひとつない空から滝のような雨が降ってくる。驟雨は大地に染みこみ、そこから霧が発生した。もうもうと立ちこめる銀の霧。その中に一人の男が立っていた。髪も肌も、瞳も唇も、すべてが銀色だった。彼は笑っていた。目が合うと、笑いながら手を振った。得意げだった。惚れ惚れするほどいい笑顔だった。

その輪郭がほどけていく。銀の霧へと溶けていく。霧はしゅるしゅると渦を巻き、表れた時とは逆に、大地に吸い込まれて消えた。

呆気ない最後の邂逅。結局、彼は何も言わなかった。さよならさえ口にできなかった。

だが言葉は必要なかった。あの笑顔だけで充分だった。泣き男は愛するものを見つけたのだ。それを守り通すことで自分の人生に意味を与え、満足して逝ったのだ。

「いい笑顔じゃないか」

知らずのうちに、私も微笑んでいた。

「お前、そんな顔も出来たんだな」

虚無に取り憑かれている場合じゃない。自分が惨めだなんて嘆いている暇はない。私もあの泣き男のように、最後の一滴までこの命を生き尽くすのだ。すべてやり尽くしたと、心残りは何もないと、満足して笑えるようになるまで、私はまだ死ぬわけにはいかない。

…\*…\*…

さて、『泣き男』の話はこれでお終いだ。

ああ、そうだな。与太話にしか聞こえないよな。だから信じる信じないは、それぞれの判断に任せるよ。

なら、なぜこんな話をしたのかって？

それは私が人の身だからさ。魔物と違ってこの命は永遠じゃない。だから誰かに聞いてほしかった。私がいなくなったら後も覚えていてほしかった。銀霧の中に現れた不思議な青年のことを、笑顔で消えていった泣き男のことを、私以外の誰かにも知っておいてほしかったんだよ。

